

ガタリ、ライブニッツ、世界とうまくやること

——『カオスマーズ』読解を中心にたどるガタリ

要旨

氏名：田中佑樹

本論の問いは、この世界とうまくやることが具体的にどのようなものであるか、である。本論はこの問いにフェリックス・ガタリ（1930 - 1992）の思想を追うという形で応答したい。あるいは本論の目的は、世界とうまくやることがガタリの根幹的な主張であると提示することであると言ってもよい。

本論が明らかにしたいガタリ概念は、『カオスマーズ』において主要な論題となったエコゾフィー、カオスマーズ、メタモデルの大きく3つである。本論はこれら3つの概念を明らかにしながら、ガタリの主張すなわち世界とうまくやることがどのようなものであるかを提示することを試みる。

第一章ではエコゾフィーを明らかにしたい。それにあたって論題となるのは、ガタリの主張である、世界とうまくやることを呈示するアプローチそのものが含みこむ困難である。具体的に本論はこのアプローチの困難の解決策として、地質作用アプローチ、ガタリの記号論という二つの道筋を呈示する。

第二章ではメタモデルがテーマとなるが、実際に論じられるのは地質作用アプローチから見たガタリである。このアプローチによってガタリの重要な地質作用としてライブニッツ（1646-1716）を取り出し、このライブニッツを導きの糸に『カオスマーズ』における議論を概観する。具体的にガタリ思想すなわち世界とうまくやることの内実として、〈切断〉と横断性を見出す。

第三章はメタモデルの解明であるが、論じられるのはガタリの記号論である。記号論及びライブニッツの分析を通じて、共感性を持った質料をプロセスの中で提示することを、世界とうまくやること具体的な様態として示す。